

## 主論文の要約

### 韓国のキリスト教主義高等教育機関の形成過程 —教育統制下における教団の「協調」戦略—

松本麻人

本研究は、日本統治期の朝鮮及び植民地解放後の韓国における軍事政権下の抑圧的な厳しい統制下で、高等教育を維持するためにキリスト教団が制度や政策に協調的な戦略行動をとり、その結果量的規模や学問領域を拡張するキリスト教主義高等教育機関が形成された過程の解明を目的とする。朝鮮における近代高等教育の形成に寄与したと評価され、現代韓国においても4年制大学の4割を占めるキリスト教主義大学が、植民地期や軍事政権期の厳しい状況下でなぜ高等教育を維持し、拡張することができたのか、その背景要因については十分に明らかにされていない。本研究は、高等教育をめぐる利害集団、すなわちキリスト教団やキリスト教主義高等教育機関、為政者、社会の間で生じた葛藤や妥協に注目し、その過程でキリスト教団がとった高等教育事業戦略と、キリスト教主義高等教育機関の拡張に対するその影響について論じる。

本研究のメインのリサーチクエスチョンとして、「量的規模や教育内容を拡張するキリスト教主義高等教育機関の性格を形成した要因は何か」と設定する。そして次の3点をサブのリサーチクエスチョンとする。①キリスト教主義教育ないし教育機関を抑制する為政者の教育政策に対し、教団はどのように対応したのか、②教団間あるいは教団と教育機関間において、宗教教育の縮小や専攻分野の拡張に対する方針の違いはどのように生じたのか、③教団とキリスト教主義高等教育機関は、高等教育の需要の高まりと機関間の競争的環境にどのように対応したのか。

研究の枠組みとして、本研究はバートン・クラークが唱えるトライアングル・モデルを援用する。トライアングル・モデルは、国家権威、市場、大学寡頭制の3者の関係から成る高等教育のシステム像を提示する。キリスト教主義高等教育機関がその経営母体であるキリスト教団の影響下にあったものと仮定すると、高等教育機関の運営に影響を及ぼす要素としてキリスト教団を組み込む必要がある。本研究は、トライアングル・モデルを援用し、高等教育の利害をめぐる国家や市場に影響を及ぼしうる主体として、キリスト教団とキリスト教主義高等教育機関を設定する。本研究は、主に文献調査の方法で進める。キリスト教団によって作成された報告書や機関誌、各種の政策文書、各学校史、新聞・雑誌記事、各大学のウェブサイト等から入手可能な資料、そのほか先行研究となる文献等の分析を行う。

本研究の意義は、次の3点にある。第1に、政府（為政者）と教団の間で生じる葛藤が政策に協調的な姿勢を維持するキリスト教団の性格形成に与えた影響を明らかにすることで、韓国のキリスト教主義高等教育機関の形成過程を考察するための新たな視座を提示することである。第2に、これまで一元的に捉えられてきたキリスト教主義高等教育の主体

について、教団と高等教育機関及び教団内の各集団という主体の多元性を示すことである。第 3 に、キリスト教主義高等教育機関の性格形成の要因として教団の影響を明らかにすることで、クラークのトライアングル・モデルをより多元的なモデルを示すことである。これにより、他の国・地域のキリスト教主義高等教育機関の展開を比較するための枠組みを提示する。

第 1 章では、朝鮮及び韓国においてキリスト教が植民地期や軍事独裁政権期の精神的な拠り所として民衆の間に浸透し、量的に大きく拡大したことを明らかにした。民主主義や人道主義を掲げるキリスト教は、植民地期においては独立運動に加わった朝鮮人の支持を集め、また植民地解放後の軍事政権期においては急速な社会変化に伴う不安の高まりの中で民衆の精神的支柱となることで信徒数を増やしていった。

第 2 章では、監理派の教育事業戦略の分析を通して、監理派が教育事業の維持と強化のため、中等教育機関の再編などを通して、総督府の教育体制と比肩する教育体制の構築を目指していたことを明らかにした。学校の正規課程における宗教教育の禁止を断行した朝鮮総督府の政策に対し、長老派の主流派はこれに徹底抗戦する構えを見せたが、監理派は既存の自派の学校に新制度に基づいて宗教教育を実施しない課程を設けるなど、総督府の政策に追従する姿勢を示した。その背景には、総督府のフォーマルな教育体制に比肩する教育体制を構築するという監理派の戦略的な事業構想があった。教勢で長老派に劣り、また早い段階から教育事業に熱心であった監理派にとって、初等教育から高等教育まで続く一大教育体制の構築は、朝鮮のキリスト教主義教育において優位に立つために重要であった。こうした監理派の戦略は、韓国キリスト教主義大学の「世俗」的な側面の拡張の原点ともいえる。

第 3 章では、延禧専門学校が宗教教育を重視する教団の学校であるにもかかわらず、宗教教育を実施できない専門学校の認可を受けた背景として、教育体制の構築を重視する監理派の積極的な関与や学校設置者の高等教育理念、多くの教育機関が集中していたソウルの地域の特性が明らかとなった。宣教団を運営母体としながらも延禧専門学校は、その教育内容においては一般学問領域を重視し、リベラルアーツを含む複合型の専門学校として設置された。その背景にあったのは、総督府による宗教教育の禁止であった。同校の設置は、一大教育体制の構築を目指す監理派と、総合大学の設置に意欲的なソウルを拠点とする長老派の一部の協働によって実現した。先行研究において延禧専門学校は、宗教教育を重視する長老派の高等教育機関として描かれてきたが、実際には長老派の主流からは一定の距離を置いた機関として形成されたことを指摘した。

第 4 章では、梨花女子専門学校を通じた教員養成体制の確立が監理派の教育事業戦略の文脈において不可欠であったことを明らかにした。先行研究によると、梨花学堂大学科を前身とする梨花女子専門学校は、総督府の高等教育抑制政策によって大学への昇格を断念したとされる。しかし本章で明らかとなったのは、専門学校への昇格は大学昇格の道を閉ざされたことによる消極的な結果ではなく、監理派の学校教育体制の完成に向けてなされ

た、より積極的な姿勢に基づく選択だったことである。

第 5 章では、教団の教育理念を最も強く反映した高等教育機関は、結果的に総督府との対立を免れ得ず閉鎖を余儀なくされた一方、植民地教育体制への協調路線を維持した監理派の戦略が有効であったことを明らかにした。キリスト教が盛んであった朝鮮北西地域の中心都市である平壤に設置された崇実専門学校は、ソウルの延禧専門学校とは異なり、宗教教育を重視する保守的な長老派諸派によって運営された小規模宗派カレッジとして位置づけられる。キリスト教主義的な理念に基底を置きつつリベラルアーツ教育を実施したが、同時に実業教育にも着手した。しかし、天皇制イデオロギーを強める植民地教育政策との衝突を回避することができず、最終的には神社参拝の強制を拒絶したことにより閉校を余儀なくされた。崇実専門学校はある意味、日本統治期に設置されたキリスト教主義専門学校の中では最も正統なキリスト教主義高等教育機関であったといえるが、その存続を全うできなかった事実は、植民地教育政策の抑圧性を露わにすると同時に、監理派の現実的路線の戦略の有効性を一層鮮明にした。

第 6 章では、宗教教育に厳格な姿勢で臨んだ長老派であったが、教団の社会事業の遂行に必要な人材養成のために自派の教育理念の実践において妥協もみせる柔軟性があったことを明らかにした。医学の専門教育機関であるセブランス連合医科専門学校は、統治期前半期において唯一の医学系私立教育機関として存続した。他の官公立医学専門学校あるいは京城帝大において日本人学生が多く占める中、早くから朝鮮人医療従事者の育成にあたった意義は極めて大きい。特に、朝鮮人医師に研究機会を提供した。そして、延禧専門学校と異なり、セブランス連合医科専門学校の設置・運営には宗教教育を重視する長老派の主流派も積極的に関与した。医療事業の担い手の養成という重要性は、長老派に妥協させるに十分であった。もともと、宗教教育を重視する長老派の理念が強く反映され、正規課程外とはいえ宗教教育も熱心に取り組みされた。宗教教育に固執した長老派であったが、医療従事者の養成という目的の下、柔軟な姿勢を示す戦略的な柔軟性を有していた。

第 7 章では、植民地解放後の新しい高等教育制度の形成期におけるキリスト教主義高等教育機関の拡張が、解放以前の時期に教団によって形成された自派の聖職者養成機関を基盤とするものであり、教団の教育事業戦略の連続性によって生じたものであることを明らかにした。解放後の時期においては、これまでの抑圧的な高等教育政策とは打って変わって、高等教育機関の設置に寛容的な姿勢が示され、多くの高等教育機関が設立された。その中にはキリスト教主義高等教育機関も少なくなかったが、それらの機関は 1945 年以降に初めて設置されたのではなく、解放以前からあった聖職者養成機関である神学校を前身とするものも多かった。それらの神学校は、解放後の混乱により高等教育制度が未整備の中で大学あるいは各種学校として認可された。今日のキリスト教主義大学は 1945 年以降に大学として発展したが、その少なくない数が 1945 年以前から聖職者養成課程を中心とするキリスト教主義教育を提供しており、解放後のキリスト教主義大学の隆盛の基盤を成していた。

第 8 章では、無認可神学校の各種学校化が、政府にとってはキリスト教主義高等教育機関の国のシステムへの取込を意味し、キリスト教側にとっては神学教育を維持しつつ、正規の高等教育機関としての認可の獲得に成功したことを明らかにした。政府は、違法状態で設置・運営されていた「無認可神学校」を取り締まる過程で、一定水準以上の神学校を高等教育機関の一種である各種学校に認可した。こうした神学校の再編は、キリスト教主義高等教育機関の高等教育市場への参入を促すことにもつながった。そして学生獲得のために多くの神学校が多様な学科を設置し、大規模化する素地を整えていった。無認可神学校の淘汰と一部神学校の各種学校化は、高等教育の拡大政策に協調するキリスト教主義大学を形成する契機となったといえる。

第 9 章では、高等教育市場の拡大に伴い、4 年制大学との競合を背景に、短期高等教育機関である専門大学における学士課程の設置が進行していることを明らかにした。現代において、かつてのキリスト教主義専門大学はすべて 4 年制大学へ転換している。教育の多様化という観点から専門大学を参照軸とすると、聖職者の養成を主眼とする神学校は、中堅技術者の養成を主要な機能とする専門大学と同様に、4 年制大学との「棲み分け」ができていた。しかし、いずれも 4 年制大学との競合の過程で学科あるいは課程の多様化を迫られることとなったが、それは高等教育の「ユニバーサル化」に伴う変容であり、同時に高等教育の市場化が進行した結果であった。

以上の考察から明らかになったのは、為政者の厳しい統制下で高等教育を継続するために、教育内容などで一定の妥協をしつつも国の制度・政策に沿うことで、水準の高い教育や宗教教育といった教育理念の本質部分を維持した教団の戦略である。高等教育の事業戦略では各教団の教育方針によって違いも生じたのだが、たとえ同じ教団内であっても教団本部で立場を異にする高等教育機関があったことは重要である。教団の意に反して宗教教育を絶対視しないキリスト教主義高等教育機関が、より総合的な高等教育を提供することで、宗教教育の抑圧政策下でも高度な高等教育機会の維持を可能としたからである。そして、高等教育に対する社会のニーズが高まる中、政府の規制緩和の下で他の高等教育機関が増加すると、キリスト教主義高等教育機関は「世俗的」な側面を一層伸張させ、多様な専攻領域や学部・学科を擁する高等教育機関へと展開していった。このように、本研究は、抑圧的な政策下で教団が高等教育を維持するために政策に協調的な戦略を展開し、その結果キリスト教主義高等教育機関の量的拡大や学問領域の多様化が促されたことを明らかにした。

そして、クラークのトライアングル・モデルを援用した本研究は、韓国のキリスト教主義高等教育の運営に影響を及ぼす要素として、同モデルが提示する国家、市場、大学の 3 要素にキリスト教団という大学の経営母体を加える分析枠組みの必要性を示唆した。